

聖書：コリント人への手紙第二 1：12～20

説教題：この方によって「アーメン」

日時：2024年9月15日（朝拝）

今日の箇所にはパウロとコリント教会の間にあった問題が現れています。12節でパウロは自分たちが誇りとするのは、純真さと誠実さをもって行動して来たことだと述べています。あえてこのようなことを言っているのは、パウロたちの純真さと誠実さが疑われる状況があったことを暗示しています。また13節に「私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません」とありますが、これもパウロの手紙は理解が難しい、彼の言っていることは良く分からないとするコリント人たちの反応があったことを伺わせます。そのためパウロはこのような形での弁明を強いられていると考えられます。この彼の弁明は単に自分の名誉回復のためではありません。これは福音のための弁明です。コリントには、この手紙を読み進める中でだんだん明らかになりますが、パウロを批判し、別の福音を語る自称大使徒たちがいました。ですからパウロは無視できないのです。コリント人たちがパウロから聞いた正しい福音に立ち続け、神の救いと祝福に生かされ続けるために、パウロは使徒としての自らを弁明しているのがこのコリント人への手紙第二なのです。

12節からもう一度見て行きます。最初に「私たちが誇りとする」とあります。ある人はここを読んで、キリスト教において何かを誇って良かったらどうかと思うかもしれませんが、もちろん間違った誇りはいけません。しかし正しい誇りがあります。「誇る者は主を誇れ」と先の第一の手紙1章31節にありました。パウロはここで自分たちの純真さと誠実さを弁明していますが、良く見るとそこに「神から来る」という言葉がついています。つまり神がくださった純真さ、誠実さについて彼は証しているのであって、神に栄光を帰しているわけです。またこれは「私たちの良心が証していること」とも言います。つまり神の御前で考えてそうであるということです。やましい思い、責められる思いはないということです。もちろんパウロは完全な人間、罪がない人間であったわけではありません。神の前に正しくない行動を取ったり、正しくない思いを持ったこともあったでしょう。しかし彼はそのたびに悔い改めて神の前で清い良心を保つように心がけて生活していたことを、他の多くの箇所でも証しています。その神に導かれて、この世において誠実に歩んでいると言います。「特にあなたがたに対して」という部分は、コリント教会との間にあったある種の緊張関係を暗

示するものです。つまりパウロはコリント人たちに対しては、より気を使っていた。なぜかと言えば難しい人たちがコリント教会にはいたからです。ですからパウロは彼らに対してよけい気を配り、慎重に、誠実に歩いていました。その際、「肉的な知恵によらず」とあるのは、この世の知恵によらないでということでしょう。この手紙の2章17節に「私たちは、多くの人たちのように、神のことばに混ぜ物をして売ったりせず」と出て来ます。神の言葉にこの世の知恵を混ぜて売った方が人々に受けます。人気を博します。しかしそうして来なかった。また4章1節に「ずる賢い歩みをせず」とあります。目的のためには手段を選ばず、という生き方をする人が多い中、そうして来なかった。そうではなく、「神の恵みによって行動してきた」と言います。ただ神の力により頼み、神に祈り、神に信頼して、誠実に歩んできたと言っています。

それは手紙においても同じだというのが13節です。コリント教会のある人たちは、パウロの手紙は理解が難しいと言っていたようですが、それは内容が高度過ぎるとか言葉が難解だという意味ではなかったようです。この後を読むと見えて来ることは、彼らはパウロの言葉には裏があるのではないかと感じていたということです。文字としてはそう書いてあっても真意は別のところにあるのではないか。彼は二枚舌なのではないか。そのような不信感をもって受け止める人たちがいたので、パウロは「そうではない。理解できること以外は何も書いていない。手紙においても私は誠実である」と言っているのです。

次の「あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解している」とあるのは、どういう意味でしょうか。パウロがコリント教会に宛てた手紙は全部で4通あったことを以前に述べました。聖書に収められているⅠコリント書は2通目の手紙で、今私たちが読んでいるⅡコリント書は4通目に当たります。その間に3通目の手紙があり、それがこの後2章4節に出て来る「涙ながらに書いた手紙」です。それは失われた手紙で、コリント教会の悔い改めを求める、ある意味で厳しい内容の手紙だったようです。それが受け止められたことを知り、安堵して書かれたのが、このコリント人への手紙第二です。ですからコリント人たちはある程度パウロを理解したわけです。しかしパウロはそこから進んで、主イエスの日には、すなわち主の再臨の日には、コリント人たちが完全に理解してくれることを望んでいます。ここに「主イエスの日には、あなたがたが私たちの誇りであるように」とあります。これももちろん人間的な誇りではありません。神が働いてくださって、やがての日にコリント人たちが素晴らしい

実で満たされているのを見て、パウロは大いに喜ぶ。そのことをパウロは確信しているということです。その日にコリント人たちは神によってパウロたちの誇りなのです。それと同じように、「私たちもあなたがたの誇りであることを」とパウロは言います。これは逆にコリント人が主の再臨の日にはパウロたちを誇りに思うということです。神が自分たちのところへパウロたちを送ってくださり、そのパウロたちを通して、自分たちがここまで導かれたことを知って神に感謝し、またパウロたちを誇りに思うということです。そのようにパウロたちを捉えるようになってこそ、彼らはパウロたちを完全に理解したことになるのです。そのように互いに神にあって感謝し、信頼し合うようになることをパウロは切望して、この手紙を書いているのです。

さて以上の一般的な話に続いて 15 節以降ではコリント教会との間に生じていた具体的な問題が記され始めます。まずここで言われているのは 2 回目のコリント訪問にまつわることです。パウロは先のコリント人への手紙第一 16 章 5～7 節で今後の計画について次のように述べていました。「私はマケドニアを通過して、あなたがたのところへ行きます。マケドニアはただ通過し、おそらく、あなたがたのところに滞在するでしょう。冬を越すことになるかもしれません。どこに向かうにしても、あなたがたに送り出してもらうためです。私は今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところにしばらく滞在したいと願っています。」 この第一の手紙を書いた時、パウロはエペソにいました。そのエペソからマケドニアを通過してコリントへ行くとは、エーゲ海を囲むように陸路をぐるっと回ってコリントへ行くということです。しかしその後、先に遣わしたテモテが戻って来て、コリント教会の状況が悪化していることをパウロに告げたようです。緊急事態が発生していることを彼は知りました。そこで彼はエーゲ海を挟んで対岸にあるコリントへとまず直行したのです。パウロとしてはそのように先にコリントへ行き、そこからマケドニアの諸教会を訪問し、再びコリントへと戻って来て、それから異邦人教会で集めた献金を携えてユダヤ、エルサレムへ行くという計画を立てたようです。ところがこの突如行ったコリント訪問はかなりの痛みを伴う訪問になったようでした。コリント教会にいた反対者が公然とパウロを批判し、罵倒したようです。そこで彼は一旦コリントの地を離れます。ところがマケドニアに赴いて、またコリントに帰って来るとパウロは言っていたのに、彼は帰って来ません。彼はその後、対岸のエペソへと戻って行った。そこで反対者たちはこれを取り上げ、一層パウロに対するネガティブキャンペーンを展開したのです。ほらみたことか！彼の言うことは当てになら

ない！帰って来ると言ったのに帰って来ない！彼は簡単に約束を反故にする男だ。今回は長期間、あなたがたのところにとどまりたいと言っていたくせに、そうしない。つまり 17 節にあるように、彼は「はい」と言いながら、同時に「いいえ」と言う人である。矛盾する二つのことを同時に言う、不誠実な人間である。だから彼は信頼に値しない。あのような者が使徒であるはずがない！と声高に語る者たちがいたのです。

そこでパウロは 18 節以降で「神の真実にかけて言う」と言って弁明します。「あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である、というようなものではありません」と。すなわち、気まぐれで、いい加減な言葉ではない。19 節ではパウロがシルワノやテモテと行った最初のコリント宣教のことを思い起こさせています。シルワノは別名シラスで、この 3 人が第 2 次伝道旅行でコリント伝道を行ったことが使徒の働き 18 章 5 節に記されています。その彼らがコリント人たちの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではない。そのような定まらない、時と状況によって「はい」になったり、「いいえ」になったりする方ではない。この方においては「はい」だけがあるとパウロは言います。イエス・キリストは神の福音における真実な答えです。その福音をパウロたちはコリント人の間で伝えました。その真実な神のメッセージを伝えた私たちが一方で旅行の予定について話す時、不真実に話すはずがないではないかということです。真実な神の福音を宣べ伝えた私たちの言葉は、福音を語る時ではない場合も、同じように真実なものとして受け止められるべきではないかと彼は言っているのでしょう。

さてどういう意味でキリストにおいては「はい」だけがあると言えるのでしょうか。そのことが 20 節で説明されます。そこに「神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました」とあります。つまりキリストは神の救いの約束のすべてを成就した方であるということです。神は旧約時代から救いの約束を語って来られました。人間の墮落直後の創世記 3 章 15 節においてすでに一人の女の子孫を通して救うと約束くださいました。またアブラハムに対して彼から出る一人の子孫によって地のすべての部族は祝福されると言われました。またダビデに対して彼から出る子がまことの王となり、その王国はとこしえに堅く立つと言われました。このような神が語って来られた救いの約束はイエス・キリストにおいてことごとく成就されました。ですからこのキリストこそ神の約束における「Yes」なる方、「はい」なるお方です。

この神の真実を受け止めて、0 節後半に「それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです」とあります。ここに私たちが今朝心に留めるべき大切なメッセージがあると思います。私たちは「アーメン」という言葉をどのような思いで語っているのでしょうか。もしかするとあまり良く考えず、祈りや賛美の最後につけるお決まりの文句程度に思っているかもしれません。しかしアーメンとはご存知の通り、「その通りです」という意味です。神はキリストにおいてついに救いの約束をすべて成就されました。このキリストにおいて神の約束は「はい」となりました。この神の「はい」を受けて私たちは「アーメン！」と言うのです。神は「はい」と「いいえ」が混じった曖昧な態度を取られたのではなく、ご自身の約束すべてに対して、キリストにおいて「はい」を示してくださいました。私たちはこの神の真実に心から感謝し、感激して、神に向かって「その通りです!」「アーメン!」と言い、神に栄光を帰すのです。

パウロはこのような神の真実に触れ、感謝している私たち、またそれを宣べ伝えている私たちが不誠実であることはあるだろうかと言っています。確かに表面上、計画は変わりました。マケドニアへ行ってから再びあなたがたのところに帰ると最初は言いましたが、帰りませんでした。しかしそれはパウロが正しい加減で不誠実であったからではありません。彼は自分の都合や利益で動いたわけではありません。この後見るように、それはむしろ彼らのためです。23 節にそのことが述べられます。また 2 章 1 節にあります。早くにコリントを再訪問することは彼らの益にならないと判断したからです。行くと言ったから何が何でも行くと言って、それを実行したら大爆発が生じかねません。その結果、取り返しのつかないことに至ってしまいかねません。そこで彼は間を置くこととし、まずは涙ながらに手紙をしたためて、それを送ったのです。そしてそれを経て、今このコリント人への手紙第二を書き送ったのです。そしてその後、実際にコリントに行くのです。このような経過にむしろコリント人を大切に考え、彼らに対して真実に、誠実に動いているパウロが証しされています。

今日、私たちが改めて心に留めたいのは、神は約束に真実な方であられるということです。キリストにおいて神の約束はことごとく成就されました。イエス様は神の約束における「はい」なるお方です。それを知る私たちは心からの感謝をもって「アーメン」と応答するのです。礼拝時におけるアーメンの大合唱はキリストにおいて救いの約束を誠実に果たしてくださった神に対する私たちの心からの賛美の応答です。そ

のことを思って、心を込めてアーメンと言ひ、神に栄光を帰す者たちでありたいと思います。

そしてそのことに導かれて私たちもまた真実に生きる者たちへ導かれたいと思います。パウロは誠実に生きている自分を証しました。清い良心をもってそのように言うことができました。そんな彼を見て私たちはスゴイ！と驚きますが、パウロはこの誠実さも「神から来る」ものだと 12 節で言っていました。私たちも神の真実を見上げ、感謝するところから誠実な歩みを導かれたいと思います。そのようにしても人々から誤解されることはあるかもしれません。パウロのように心痛い経験をするかもしれません。しかしパウロはだからと言って投げ捨てず、なおへりくだって仕えています。その姿からも引き続き学びたいと思います。願わくはこの真実な神とともに見上げ、心からアーメンと賛美するところから、この神を映し出す歩みを導かれ、そこから互いに真実で信頼し合う関係を導かれて、そのことを通して神に栄光を帰す歩みを！と導かれてまいりたいと思います。